

研究

毛利市三郎領分(海) (2)

山本 保

(会員 佐伯市池船町)

米水津郷内の浦代の港まで、
大島より、海上三里。

この間に、鶴御崎と申す難所有り。

日和あしく、南風に候へば、上下の船渡暇なし。

この浦代の港、長さ六町、はば三町。

岸深く、潮満干にかまいなく、何風にても、苦し
からず。

船かかりよし。

港の口、辰巳(東南)に向く。

城下より海上八里。

陸路三里三〇町。牛馬の通いなし。

米水津郷には、

大庄屋(色利浦)

庄屋(宮野浦)

小庄屋(色利浦、浦代浦、竹野浦、小浦、宮野浦)
などがいました。

明治二六年十一月五日

国木田独歩は、浦代峠を利用して、元越山に登っ
ています。

明治二六年一二月二、三、四日

独歩は、夜葛港より乗船、鶴見崎方面(猿戸辺)へ
鹿狩りに行っています。

そして、浦代峠を越して、陸路、佐伯に帰って
います。同行一〇名。一組は船で。

明治二七年四月二二日

独歩、再び元越山(五八二町)へ、木立方面から
登っています。

明治四三年には、浦代トンネルも開通し、車馬も通るようになり、陸の孤島であつた村に、新紀元を画しました。

旧山道の山桜と並んで、トンネルの開通した浦代峠路には、吉野桜が植えられ、やがて、県下の桜の名所となりました。

昭和四四年一〇月二三日

夢の新浦代トンネルが、開通しました。

全長六〇三㍎、大型バスの運行も可能になり、農水産物の輸送も、容易になりました。

昭和五六年四月七日

米水津村浦代浦と鶴見町地松浦とを結ぶ、鶴御崎トンネルが新設されました。総延長一六五〇㍎です。

このほか、小浦(米水津村)・中越(鶴見町)ふれあいトンネル(八四〇㍎)、粟嶋トンネル(九〇㍎)の二つが、ふるさと農道として開通し、蒲江町を含めた、海岸部の町村の交流を図っています。

一 蒲江の内、泊の港より浦代の港まで、海上五里。

この間に、ぎしめき、せり崎とて、難所有り。日和あしく、南風にて候へば、上下の船、渡暇なし。

この港の長さ一五町、はば五町。

岸深く、潮入満干にかまいなく、何風にても苦しからず。船かかりよし。

港の入口、南の風に候へば、波高く、大風に分け入りならず。

港の口、東南にむかい、沖に嶋あり。

港の口より、嶋の間、一五町。

この嶋、西の方に瀬底あり。

城下より海上二三里。

これより、有馬左衛門佐(日向・延岡城主七万石)領分。

蒲江浦組には、

大庄屋(蒲江地下)

小庄屋(波当津、本口、河内、猪串、野々河内、森

崎、丸市尾、坪、葛原)

がいました。一〇人。

入津浦組には、

大庄屋(畑野浦)

小庄屋(畑野浦、西野浦、竹野浦河内、楠本)
がいました。以上五人。

佐伯市大入島には、

庄屋(守後浦、高松浦、日向泊浦、塩内浦、荒網
代浦、石間浦、久保浦、片神浦)以上八人。

佐伯市八幡方面では、

大庄屋(海崎村、戸穴村)
庄屋(笹良目浦、代後浦)
小庄屋(海崎村、戸穴村)以上六人。

佐伯市西上浦地区では、

大庄屋(狩生村)
庄屋(風無浦、古江浦、晞干浦、内の浦)
小庄屋(狩生村)以上六人。

上浦町では、

庄屋(浅海井浦、津井浦、夏井浦、福泊浦、蒲戸
浦)以上五人。

六か所の海上番所は、不審な浪人(流浪人)や、禁制品を扱う、悪徳商人などが、立ち入らないように、また、他藩の漁船がやって来て、わが沿岸漁場を荒らすことのないよう、そして、また藩御用の米穀や、特産物の輸送について連絡、あるいは難波船の救援など、いろいろでした。

なにか、特別なことが起きると、それは、早速御浦奉行に報告するようになっていました。

しかし、そのようなことは、めったにあることなく、浦々をめぐって、農作や漁況などを調べ、とくに、漁場(漁港や加工施設や、鰯(いわし)の干浜など)見てまわり、諸連上銀(雑税)の取立てについての監視を怠りませんでした。

文化七年(二八一〇)二月下旬

天文方伊能忠敬は、臼杵城下から来巡、津久見か

ら測量をはじめ、四浦・上浦を経て、三月四日、佐伯城下に入りました。

その後は、中浦から、鶴御崎をまわって、米水津に入り、入津、蒲江と日数と重ねて、波当津を最後に国境を越えて、日向に入ったのは四月二日、実に四〇日にわたって、佐伯九十九浦の海岸の出入り、水深、距離、港の事情を、精密正確に測定しています。

彼は、佐伯湾の景色を、日本一のすばらしさと、たたえています。

石 峠



佩楯山の東には石峠山・楯ヶ城山などが連なり、この間に石峠・笹尾峠、あるいは少し離れて目白峠などがある。

ところで、最近は自動車で頂上まで登れる山が多くなった。無線中継塔やテレビ塔などが建てられたためだ。佩楯山一帯は交通通信の要地だけにそうした山が多く、石峠山もその一つ。

山頂に塔があることを、山登り好きの人たちの間では「山がカンザシをさしてい

る」という。石峠山のカンザシ目指して、野津町側から登ってみた。清水原で国道10号線と分かれ、岩屋から白岩へとたどる。白岩から石場ダム、出羽、目白峠方面への道があるが、私たちは狭い方の道を選んで登りにかかる。谷沿いの道は暗いが、路面はしっかりしている。

いよいよ急坂にかかってカーブを繰り返すところでは簡易舗装の跡さえある。さほど苦労もなく石峠。山頂まではあとひと走りだ。訪れた日は狩猟解禁の日だった。三人のハンターが峠に車を止め、犬を連れて出発の準備をしていた。十数人で山に入ったといい、互いに無線で連絡をとっている。聞けば、すでにイノシシ一頭を仕留めたグループもいるとのこと。犬のはえる声は山腹にこだましていた。

「この峠が鳥獣保護区との境なんです。石峠山、つまり東の方では猟ができません」といいながら、三人は峠の西側の尾根を指してヤブのなかに消えていった。それを追っかけるように、続いてまた三人のハンターが車二台で峠に着いた。

石峠から本匠村に下るには、西の山腹の巻いて上腰越に出なくてはならない。もちろん最初は歩道だったが、ここに車道を開くため私費を投じた人がいる。このためずいぶん便利になり、私も数年前にはこれを利用して本匠村から車で石峠山に登ったものだ。

ところが今回は車の通行不能。上腰越の谷を渡る橋が崩れ、歩いては渡れるが車は無理になったのである。これにはハンターたちも困っていた。「せつかくの機動力が生かせない」とくやしがる。私たちも、いま来た道を引き返すことにした。背後に銃声。獲物はなんだったろうか。谷間の平地に下り着くと、田畑の山際

にイノシシよけのさくが目についた(U・峠シリーズ⑥7・大分合同新聞・昭和五十二年十一月二十五日版)。